



# 『我が身にたどる姫君』 「音羽山」考 「音羽山」に導かれる「音」をめぐって

著者	越田 健介
雑誌名	日本文芸論稿
号	43
ページ	1-18
発行年	2020-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00129598">http://hdl.handle.net/10097/00129598</a>

# 『我が身にたどる姫君』 「音羽山」 考

—— 「音羽山」 に導かれる 「音」 をめぐって ——

越田 健介

## 一 はじめに

が身にはじめてうらやまれ給ふ。

(巻一・一一頁)

春夏秋冬のゆきかはるにつけて、慰む方とは、つれづれと  
うちながめつつ、空ゆく月を慕ふとしもあらねど、西の山の  
端、都の方には通はずしもあらぬ心の道さへ閉ぢつる心地し  
て、日ごろ降りやまぬ雪のあやにくさには、まして来し方ゆ  
く先かきくらし、ものがなしき夕べの空、踏み分けたる跡な  
き庭を、端近うながめおはするさま・かたち、げにかうさび  
しき深山の雪に閉ぢられ給ふべくも見えず、あたらしうめで  
たきを、かつ見てもあかず、荒き風もおそろしうのみ思ひい  
たづき給ふ尼上の御掟の、あはれに頼もしきにも、いづれを  
何と分かむにしも、それに深さのよるべきならねど、なほ  
かなりしその行方とも、さだかにはるけやらぬいぶせさぞ、  
わがなみなみならぬ際まで誰かは。おのがじしうち頼み、お  
ぼつかなき所なきには、めづらしかるまじきことなれど、我

従来指摘されているように、『我が身にたどる姫君』(以下、『我が  
身』の冒頭は、「狭衣型」とも呼ばれる、物語に常套的な、とき、場  
所、人物についての紹介を後述に譲って主人公を点描する形で始める、  
というある種の形式に倣っている。雪の降りしきる人目も稀な「山里」  
の風景とその風景を「端近」<sup>①</sup>にいてながめ遣る女君の懊悩とが響き合  
った「景情一体型」<sup>②</sup>の行文は、辛島正雄氏が、「あらたまつた語り口  
ながら、典拠として特定できる詩歌もなく、それに続く表現・内容も、  
華麗とは程遠い、陰鬱な気分が支配している」点で、『狭衣物語』の  
絢爛豪華を離れた、『我が身にたどる姫君』のような起筆こそが、む  
しろ中世王朝物語らしいのではないか<sup>③</sup>と述べるように、これまでの  
の典型をその下敷きとしつつ、当代に合わせたあらたな趣向が加味さ  
れていることをまとめ、肯定的に捉える評価もなされてきた。

そして、この冒頭に置かれる女君の「いかにしてありし行方をさぞとだに我が身にたどる契りなりけむ」(巻一・一一頁)の独詠に表出される、素姓がはつきりしないことへの煩悶と、女君が父と母とを探し出すという物語のありようとに、これまでの研究では夙に焦点が当てられてきたといえる。それは、いつてみれば、冒頭を縁取る我が身姫君の「情」の内実を切り口に、『我が身』がどのような作品であるかを明らかにしようとする試みでもあった。

ここで、本稿が目指すのは、従来の研究をふまえつつ、一方でほとんど顧みられることのなかった「景」、すなわち、風景やその風景が眼前に広がる空間に目を向ける形で、『我が身』という作品の世界を捉え直すことである。その成立を遡る諸物語作品の例を出すまでもなく、そのほとんどが京中や宮中を舞台に物語が起筆されている点に鑑みれば、本作品が「山里」に始まること自体、斬新な趣向であったとも思われる。『源氏物語』「若紫」巻の影響はこれまでもくり返し指摘されてきたが、「山里」が起筆に据えられることで成り立ち得た表現のあり方を改めて問い直す必要もあろう。

「山里」の雪の風景から語り起こされ、しだいに我が身姫君の心と一体となる形で綴られた冒頭も、姫君と二人の侍女との唱和をさいごに描いたあと、そのまま本格的な内容へと語り進められていく。

かくいふは、音羽山の麓なり。塞き入るる水の音も氷りむせびて、友とする松の風だに、埋もるる雪折れに、いとどしく静かなる夜のけしきに、宰相の君の、さらぬ別れいとどとりそへうち泣かれぬる。

雪降りて暮れゆく年の数ごとに昔の遠くなるぞかなしき  
とひとりごつも、折からはあはれなり。

(巻一・一五頁)

このとき、尼君の庵のあるこの「山里」が「音羽山の麓」であることに注目しておきたい。巻一に、中宮の病氣平癒の祈禱のために比叡山に使いに出た三位中将が、その帰途、尼君の庵に「笠宿り」と称して訪問する箇所がある。この叙述に照らし合わせれば、ここという「音羽山の麓」が比叡山と京とを結ぶ参詣路の途上にあるということになる。『我身にたどる姫君 1』(以下、『春秋会』<sup>6</sup>)と『中世王朝物語全集』とは共に、『八雲御抄』『滝』にある「ひえの山のふもと也」の叙述を注に掲げているが、『春秋会』が「音羽山と称するものは、他に山城と近江の国境、逢坂山の南にある大嶺、また東山三十六峰の一である清水寺東方の音羽山などがある」と補足しているように、「音羽山」がまさしくどこであるかを指すことも一考を要するものと思われる。

とはいえ、ここでの「音羽山の麓」を、史料的に実証した上で比定することは本稿の目的ではない。そうではなく、さきにも述べたように、「音羽山」という「山里」が起点にあることで、どのような作品世界を形成することが可能になったか、言い換えれば、「音羽山」という舞台が、或いはその言葉自体が作品を紡いでいく行文の中にどのような影を落としているのか、このことを本稿は分析していくものである。

その上であらかじめ一つのみとおしを述べておくと、『我が身』の

起筆に据えられた「音羽山」は、その「音」の語に導き出されるような形でさまざまな「音」——たとえば、噂話や姫君の琴といった、そうした「音」に溢れた空間であつたといえる。いささか唐突なもの言いであるかもしれないが、「おとは山おとにききつつ相坂の関のこなたに年をふるかな」(『古今集』・恋一・元方)、「おとは山おとばかりにてすぎねとやたれとてひとにあふ坂の関」(『拾玉集』<sup>7</sup>)などの例にみられるように、「音羽山」にはすでに、「音」の掛詞、或いは「音」を導くための序詞となるという、ある種の修辞上の型が成立していたことをここで思い合わせておきたい。たとえば、『我が身』巻二をみると、「音にも聞かぬ恋」という句を導く語として「音羽山」が詠み込まれた二の宮の独詠があつて、これは我が身姫君と男君との係わり合いを捉える上での鍵語となつていのである。

このように、「音羽山」によつて導き出されるさまざまな「音」が、『我が身』の物語の推進力となつて役割を果たしていることは、とりわけ目を向けられてよい点であろう。「音羽山」が起点にあることで形成され得たといえる、人々と「音羽山」とを繋ぎ合わせる「音」をめぐるさまざまな表象を掬い取つていくことで本稿の分析を試みていこうと思う。

## 二 「音羽の尼君の」「音羽山」

まず、「音羽山」に庵を持つ音羽の尼君を視座に、そもそも「音羽山」という舞台がどのような空間として設定されていたか、検討しておこう。「音羽山」に二〇年以上の歳月を送つていふという尼君が、

そもそも出家するに至つた経緯は、その素姓を紹介する段で簡単に述べられている。

この尼上は、宮の中納言と聞こえし上になむ。その中納言の御妹こそは、この中將の御母にものし給へば、わざとむつまじき御仲らひなるべきを、中納言は昔かくれ給ひにし後、世を背き、あるにもあらぬさまにてかくろへすぐし給ふうちにも、御はらから麗景殿の女御と聞こえし、とりわき御仲うるはしう思しかはしたりし、今の皇后の宮の御母にものし給ふ。

亡せ給ひにし後は、宮にもただこの尼上を、いとむつまじきものに思ひ聞こえ給へる。御ゆかり、関白殿と聞こゆるは、中宮の御はらからにものし給へば、わざとそねむ御心ならねど、なまはづかしきにより、かの北の方にもえ聞こえかはし給はず、おほかた世を通れ離れ給ひにしかば、かすかに行ひ入りてすぐし給ふなりけり。

(巻一・一八頁)

夫・宮中納言の亡きあと、尼君は出家して、「音羽山」という「山里」に世を通れたという。ここで、今西祐一郎氏の、浮舟の出家をさかいに『源氏物語』における「山里」が「平安京貴族の「山荘」から遁世者の「別所」へと、大きく変貌しようとしていた<sup>8</sup>」という指摘を思い合わせてみたい。今西氏の言を『我が身』に敷衍してみると、この「(音羽の)山里」もまた、傍線箇所にもみられるように尼君という「遁世者の「別所」」であつたと捉えてよいだろう。さらに、波線箇所にも

目を向けると、時の皇后宮と昵懇の間柄であるということがここで明かされている。つまり、音羽の尼君は、遁世をしこそすれ、都ともなお近しい距離を保っているものであり、この点はこれからの話筋に大きな影響をあたえていくことになるのである。

とはいえ、どうして「音羽山」であつたのか、その詳しい顛末は明らかにされていない。しかし、「音羽山」での歳月を送ってきた尼君にとって、三位中将の、あるいはそもそも誰かが突然に訪れてくると自体、思いもかけないような出来事であつた。

## 〔一〕

やうやう明けゆく空のけしきに、雪もすこし降りやみぬ。例の戸口に寄りおはして、「うれしき道のたよりに、かうさぶらひそめぬれば、かならずことさらになむ、このかしこまりも聞こゆべき」などのたまふ。伝へ聞こえむにかたはらいたき御ほどなれば、尼上ぞ数珠ひき鳴らしてゐざり出で給ふ。

「<sup>①</sup>人訪はぬ岩の懸路の雪のうちにならぬ月の影をみるかないともかしこきに、承りおどろき侍りつるを。たづね御覽ぜらるるもやさしかるべき庵のさまに侍れど、うちつけにや待ち聞こえさすべからむ」などぞ、いたう古りたれど、さる方にゆゑある御けはひなる。

（巻一・一七頁）

## 〔二〕

尼上、例の数珠の音古代にて寄りおはするけはひすれば、います

こしすくよかに聞こえなし給ふ。おほかたの御物語も、いとこまかに聞こえかはし給ひつつ、ふけゆくまで出で給はず。さるべきついでつくり出でて、おぼつかなき御うへを、かけかけしき筋にはあらず、推し当てにたづね聞こえ給ふに、『あなわづらはしや、人よりことにはづかしき御あたりを』と思せど、なかなか懸想びもて隠さむにあいなきすぢなれば、ただ、『<sup>②</sup>昔人の、思ひかけずかこつゆゑあるべき限にものせしを、背き捨てし山の奥には、心苦しう思ひわづらはれながら、その形見にと生ほしたて侍りし』など、まことならぬことは、続きもはかばかしからずのたまひなすに、ましてよくたどり寄りにける武蔵野を、かこたれまさり給ふはてはては、ならぬ心のあながちにあやしきをもうちかすめ、いたううちなげき給へるも、『こはよしなきわざかな。<sup>③</sup>世隠れなからむものとは知りながら、人目まれなる巖のなかを頼みけるよ。つひにはえ隠しはてざらむものゆゑ、あやしかるべきわざかな。我が身とて、その行方を確かに知らばや。ともかくも思ひ定むべき』など、ただうちはへいぶせき契りの行方ぞ、さすがに知らまほしかりける。

（巻一・二六―二七頁）

〔一〕は、三位中将が初めて尼君の庵を訪問した折、挨拶を兼ねた贈答を交わす箇所である。貴顕の三位中将を粗末な庵で出迎えたことに、驚き困惑しているさまが尼君の台詞に窺われるが、ここで傍線箇所<sup>①</sup>に目を向けてみると、尼君はこの「音羽山」を「人訪はぬ岩の懸路」だと述べている。「懸路」とは、「崖に木材などを渡して造り掛け

た道」を指すが、たとえば、『源氏物語』<sup>(9)</sup>「橋姫」巻に「うちつけに浅き心ばかりにては、かくも尋ね参るまじき山のかけ路に思うたまふるを」(⑤一四一―一四二頁)とあるように、「懸路」が遠い山里への難儀な道程の喩ともなり得ていたことが分かる。尼君もまた、このようなニュアンスを含めて「岩の懸路」といったのであろうが、さらに「人訪はぬ」という修飾にも窺われるように、尼君が世の中との交誼を一切断っているため、「音羽山」には普段、誰も訪れてこないことがここで語られている。

一方、「三」では、我が身姫君の素姓を詮索する三位中将への困惑が語り出されている。傍線箇所②にある「背き捨てし山の奥」という言い方も、もちろん、三位中将への謙遜があるとはいえ、「音羽山」がどれ程に京中と僻遠の所にあるかを述べている。さらに、傍線箇所③の「人目まれなる巖のなか」というのもこれまでと同様、尼君の「音羽山」の捉え方を如実に表す語だ。これは、『古今集』雑下「いかならむ巖の中にすまばかは世のうき事のきこえこざらむ」によるものだが、『源氏物語』「須磨」巻で、源氏が、紫の上や花散里にこの「巖の中」という語を用いて離別を告げていることもここで思い起こしておきたい。笹川博司氏は、「煩わしい世の中からの退去・隠遁ということで須磨の地が「山里」と呼ばれる」とした上で、「源氏にとって須磨退去は、まさに世の中と隔絶した「巖の中に住む」思いであったことが知られる」と述べている。<sup>(10)</sup>このようにみえてくると、尼君の「巖のなか」という言葉には、『古今集』と、さらにそれを撰った「須磨」巻との「巖の中」のイメージが共にかさなり合っているようである。「世のうきことのきこえ」でこない「山里」での隠遁生活、殊にそこ

は「人目まれなる」所であって、世間との係わり合いも断ち切られているが故に「巖の中に住む」かのような。それ故、女君を匿うのにも適していると思った尼君は、「音羽山」を「頼み」にしてきたと語られているのである。

こうみえてくると、「音羽山」で過ごしてきた尼君が、三位中将の度々の訪問に困惑するのも必至であつたといえよう。このあと、三位中将の噂を耳にした二の宮が「音羽山」を訪問し、女君の許に押し入るといふ事件が起こる。こうしたことがかさなつたため、尼君はこれまでにあつた出来事を詳細に伝えた文を皇后宮の許へ届けることにした。つまり、尼君がもともと貴顕の血筋の人々と係わり合いを持っていたことが一つの呼び水ともなつて、京中とは僻遠の所にある「音羽山」に起きた波紋が徐々に宮中へと広まるだけでなく、そこにいる人々と「音羽山」とを結び付けてしまうような事態にもなつてしまったのである。

とはいえ、叙上にみえてきた傍線箇所①、②、③にみられるように、「音羽山」は世の中との接点を持ち得ない「遁世者の「別所」」たる「山里」空間というように尼君の視点で捉えられていたはずである。殊に、「人目まれなる巖のなか」という言葉にはそのことがよく表出されているといえよう。だからこそ、我が身姫君を匿うために「音羽山」を「頼み」にしていたと語られた程であつた。しかし、その姫君にしてみれば、そのような「音羽山」で月日を送ることが逆に、我が身の素姓への煩悶を深めてしまういちばんの原因となり得ていたといえる。言い換えれば、「音羽山」が「人目まれなる巖のなか」であることで、我が身の出生の顛末を知る術がすでに断たれている状態に

身を置かれているということでもあるのだ。

しかし、だからといって、我が身姫君は「音羽山」でみずからの懊悩に鬱屈しきっているのでもないようだ。というのも、姫君は「音羽山」に漏れ来る「音」にひじょうに耳ざとく反応する素振りをみせているのである。では、ここでいったん節を改めて、我が身姫君とこの「音」との向き合い方に目を向けてみることにしよう。

### 三 「音羽山」に漏れ来る噂話

#### —— 我が身姫君と「音」について ——

「音羽山」は、我が身姫君の生来の環境である。「いはけなきほどは、そこはかとなき花紅葉につけても、深く思ひたどることなく」(巻一・一二頁) 過ごしてきたものの、歳をかさねるにつれてだんだんと父母が共にいないことや素姓への不安に苛まれるようになった。すると、その「音羽山」の風景もみずからの懊悩を照らし出すかのような鬱々さをおびたものとなってくる。

春夏秋冬のゆきかはるにつけて、慰む方とは、つれづれとうちながめつつ、空ゆく月を慕ふとしもあらねど、西の山の端、都の方には通はずしもあらぬ心の道さへ閉ぢつる心地して、日ごろ降りやまぬ雪のあやにくさには、まして来し方ゆく先かきくらし、ものがなしき夕べの空、踏み分けたる跡なき庭を、端近うながめおはするさま・かたち、げにかうさびしき深山の雪に閉ぢられ給ふべくも見えず、あたらしうめでたきを、「……」

(巻一・一一頁)

一四、五歳になった我が身姫君の、父母を思い悩む日々の慰めとは、春夏秋冬のめぐりに合わせて移ろう「音羽山」の自然を「つれづれとうちながめ」遣ることであるという。歳末の「音羽山」に降りしきる雪に、みずからの「来し方ゆく先」さえも暗澹になるという傍線箇所は、波線箇所に見える姫君の思いに起因した心象風景を語り出しているよう。「空ゆく月」は、『源氏物語』「総角」巻の、薫が大君の死を悼み詠んだ「おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば」(⑤三三三頁) によるが、それと呼応するように「西の山の端、都の方には」とつづいて、「音羽山」の西、「都の方」に「通はずしもあらぬ心の道」があるとの思いが、ここでは語り出されている。このことは、姫君が破線箇所のように「端近」で徒然を慰撫しているのと合わせて捉えておきたい。吉野瑞恵氏は、「自然の景物の中に自らの心の姿を読みとつていこうとするこの時代の人々にとって、外を眺めることのできる「端」は、数少ない外界との接触の場であり、物思いの場でもあった」とする<sup>(13)</sup>。我が身姫君が日々物思いをするのはそのような「端近」であるが、氏が述べるようにそこが「数少ない外界との接触の場」であつたのを思い合わせたい。さきにもみたように外との接点を遮断されている「音羽山」で、都へと「通はずしもあらぬ心の道」をみいだした我が身姫君は、「外界との接触」の可能性を持った「端近」で日々を送っている。このようなあり方に目を向ければ、日々に鬱屈しているようでいて、その内実は進んで父母との接点を得たいという外向的な振る舞いをもみせているのである。

そこで改めて、我が身姫君が「音羽山」でどのように過ごしているのかをみておこう。

〔Ⅲ〕

いはけなきほどは、そこはかとなき花紅葉につけても、深く思ひたどることなくてこそは生ひ出で給ふめりしかど、やうやうもの心つき給ふままに、またなく頼み給へる人も、なほまことに思ひそめしすぢにはあらぬにやと、そのことと分くまじき某の僧都の説経のついで、隠れの古御達の物語にも、世を遁れ、かかる御住まひにても、二十年には多く過ぎにけりと聞き知られ給ふ。

（巻一・一二頁）

〔Ⅳ〕

さても、いはけなかりしほどの、夢ばかり思ひ分かざりし、火影に見つけ聞こえたりし御にほひのかぎりなかりしは、おのづから忘るる世なき面影なれば、鏡の影にもやうやう思ひ合はせらるるに、いとようもたどり寄りぬべけれど、さはその方にて、かけても思ひ寄るべき身のうさかは。何ごとの報いに、我が身ひとつにかかる契りのあるべき。雲のよそ・風のつてにも、おのづから聞きつたふれば、さまざまにいつかしき御有様どものなみなみにて、まことに思ひ寄るすぢならば、誰もいかなる御心にてか、足立たぬ蛭の子とはしづみあるべきと、うちかへし思ふも、げに心得られず、ものがなしきことぞ多かる。

（巻一・一三頁）

〔Ⅲ〕、〔Ⅳ〕の傍線箇所にあるように、「音羽山」には我が身姫君の出生にまつわる噂話がしばしば漏れ聴こえていて、姫君もまたその一つに「おのづから」耳を傾けていることが窺える。〔Ⅲ〕で尼君がほんとうの母でないことを悟り、〔Ⅳ〕では父と母とが共に尊貴な身分であることを知る。各々の波線箇所では、なに故このようなおいたちになったのか「心得」られない身の上への懊悩が語られているが、それはまた、「問ひ合はすべき人もな」（巻一・一二頁）く、尼君も「うちかすめのたまふこともな」（巻一・一四頁）い「音羽山」で、漏れ来る「音」、つまり噂話が唯一父と母とを知る便となつていたのであり、それらの噂話を胸の裡でさまざま思い合わせる中で、さきのような「都の方」にはきつと父と母とがいるという慰めにも繋がつていたのであろう。

三位中将と二の宮との訪問によつて、我が身姫君は大きな転機を迎える。尼君が男君の訪問を事細かに伝えると、皇后宮は「御心騒ぎして、さる山ふところにさへたづねおはしけるよ」（巻一・三六頁）と思う。「山ふところ」の「音羽山」を頼りにしていたが、そうした所にまで通う男君の振る舞いに驚くと共に、我が身姫君を匿うためには「いかでも所を変へさせてこそ」（同頁）と決断し、早々に宮に仕える宣旨の「里」に移す計画を実行する。

まことに上陽宮といひけむ心地して、尼上の頼もしう思ひならひ給ひしかげにひき別れ、いづことだにさだかに心得ぬ世にもてかしづかれ給へば、さまざまあぢきなきもの思ひをのみし給ふ。



この主も常に住む所にもあらず、京といへど人目いとまれなり。出で入る人もかたへは口固めたれば、こはいづこにおはしますといふ人もなし。山里人もやうやう誘ひ出でつつ数そへば、見なれしに変わらねど、明け暮れは我が身のみ化物の心地して、うとましうぞ思さるる。〔……〕

(巻一・四三―四四頁)

宣旨の里は、「音羽山」のように人目も稀な所である。しかし、尼君のような頼れる人がいない上に、みなが事実を押し黙るため誰もどこにいと知らせてくれないという。共に過ごしてきた「山里人」が集まって来こそすれ、我が身姫君は「いづことだにさだかに心得ぬ世」にいるような気持ちで、しようのない思い悩みだけが募るといった体である。もちろん、姫君は「音羽山」を出、上京することを待っていたはずである。事実、「思ふ方さまにやと、さすがに急がれし道」(巻一・三九頁)と、その道程が述べられてもいた。だが、結局は「音羽山」にいたとき以上に、その思い悩みは深刻になってしまふ。それは、我が身姫君が父と母とを思う便でもあった人伝の噂話が、或いは、もつと素朴に「出で入る人も口固めたれば、こはいづこにおはしますといふ人もなし」といった、あらゆる「音」が宣旨の里では遮断されているという事態に原因をみいだせないだろうか。

「音羽山」に漏れ来る「音」は、我が身姫君の思いを左右しているようである。「端近」に出、噂話を聴くことで、我が身姫君は父母の許へと思いを遣りつつ、「音羽山」で月日を送ってきた。もちろん、そうする度に姫君の思い悩みはいっそう深まっていたようにもみえ

る。しかし、そうだからといって、知り得た事柄を胸の裡に思い合わせてみようとり返していた上に、侍女と唱和したり、琴を弾いたりもしていて、ただ「音羽山」で無声的、自閉的にのみ過ごしていたのではないことを看過してはならないだろう。それ故、「音羽山」での日々の中で反芻してきた思いの当ても外れ、しかも共に慕い合ってきた侍女とも容易に言葉を交わし得ない、宣旨の里でのさまざまな無理が姫君を苦悩させているといえる。みずからを慰め、外の世界と繋がる術でもあった「音」という接点をなくしてしまったことが、さきの傍線箇所にあるような「我が身」それ自体への懷疑に我が身姫君を至らしめたのではないだろうか。

#### 四 「音羽山」に通う男君

##### ——「音羽山の姫君」との恋——

三節では、我が身姫君の、宣旨の里をも含めた「音羽山」でのあり方を分析してきた。「音羽山」に届いた「音」を聴くことで、我が身姫君は父母への思いをいっそう深めていたといえる。

ところで、これまでとは逆に、姫君がただ一度、外に漏らした「音」があるということにも目を向けておきたい。それは、琴の「音」だ。そして、この「音」が、「音羽山」に三位中将を惹きつける原因になったといえる。さいごに、この点を糸口に、我が身姫君と「音羽山」に通う三位中将と二の宮との係わり合いがどのようにひらかれているかを分析していこう。

三位中将は中納言に昇進すると(以下、「三位中将」と呼ぶ)、「笠

宿り」の挨拶に「音羽山」を改めて訪れる。

緑の空いとうよう晴れて、のどやかなる昼つ方、つれづれに思し出でて、かの道のたよりの里に言問はむと、忍び出で給ふ。かやうの住まひにて、思ひのほかにあはれならむ人を見つけたらむ時とすずろなるあらましごとの覚ゆるぞあぢきなきや。

人騒がしきほどすぎて、御馬にていと忍びて、たそがれのほどに紛れ入り給へれば、いと近き柳の陰いたう茂りて、をさをさ見え分かるべうもあらねば、けしきもゆかしうて、木陰につたひよりてしばし聞き給ふに、箏の琴をわざとならず弾きすさびたる爪音、所からにや、なべて聞きならし給ふ都のうちには、をさをさたぐひあるまじうおどろかるやこよなきならむ。姫君の御琴の音をいみじうめでたしと思しおこるを、『これはまささまに聞こゆるものから、せちに愛敬づき、子めきたるものから、深く心にくき揺の音、いとうよう似通ひたる』と聞こゆるに、思ひのほか心移りはてて、近き小柴のもとにあながちにつたひ寄りて見給へば、簾などもおしはりてうちもあらはに見ゆ。

若きかぎり五、六人ばかり、簀子までゐこぼれて、花の心もとなきを待つなるべし。琴弾く人は柱隠れにて、まほにも見えず。こぼれかかれる額髪・髪ざしなどぞいひやらむ方なきは、移りやすき心の見なしかと、せめてまもれど、すべて見知らぬ心地ぞする。女三の宮の前裁見給ひし夕べにつきはてにし魂の、なほ残りけるにや、ただ時の間に身も砕けぬる心地ぞする。『あまりかかるにつけては、おそろしうぞあるや。物の変化にて、うち向かひ

たらむかたちのむくつけからむ時』とさへ、あやしき所からは、まこととぞ覚えぬや。

(巻一・二三―二四頁)

太線箇所は、諸注が『源氏物語』「帚木」巻の「世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ限りなくめづらしくはおぼえめ」(①六〇頁)を掲げ、「茅屋に思いがけず美女を発見するというのは、王朝物語のもつとも一般的なものであつた」(『春秋会』、八〇頁・注三)と指摘するように、三位中将は「葎の門の女君」を「音羽山」に期待して出掛けている。傍線箇所、女君をかいまみた三位中将は、「山里」の場所柄、琴の音も額髪もいっそう魅惑的に思う。さらに、これ程までとは思つてみなかったため「おそろし」さに加え「物の変化」ではないかと疑い、「音羽山」という「あやしき所」では「まこと」とも思えないという。波線箇所では、「をさをさ」や程度の違いの甚だしさを表す「こよなし」を用いて姫君の格別さがきわ立つように語っている。

「すべて見知らぬ心地」に襲われた三位中将は、破線箇所にあるように慮外にも「音羽山の姫君」に恋心が芽生えてしまう。そして、どうにかして女君と近付きになりたい三位中将は、口実に尼君との血縁を持ち出すことにした。義伯母にあたる尼君に、三位中将は殊更血縁のあるのをいって距離をつめようとする。無論、女君のことを聴き出す腹づもりであるが、応接に出た宰相の君はつれない。尼君にも直接にその素姓を尋ねるが、尼君は宮中納言の落胤とのつくり話を返す。

三位中将はこれを信じて「音羽山」との思いがけない縁に喜ぶ。  
一方、二の宮が姫君を知り得たきつかけもみておこう。

二の皇子は、**風の音**につけても、かかるすぢならで御心に入ることしなければ、ただ明け暮れは、立ち聞き・かいま見に身を苦しめ給ふなにも、この君達のいたうまめだちてあだなるところおはせぬを、いと心やましようて、いかで深く思ひつつまむこと見あらはすわざをせむと、かげにつき給へれば、ましてたび重なる音羽の里たづね給はざらむやは。

宮へむつまじう参り通ひ給ふ尼上なれば、いまさらの御通ひ路にあるまじけれど、かかる人おはすといふことぞ、夢にだにえ知り給はざりける。「若き人々のけはひして、中納言かく聞こえわたり給ふ」と、まねび聞こゆる人ありけるに、御心まどひして、隠ろへおはしましにけり。つねに御覧することこそなけれ、御供の人などもたどるべき所にしあらねば、これはましていとようたづねよらせ給ひにけり。

(巻一・三二頁)

「うたて世の人のそしり聞こゆるまであだめきすぎて、かからぬ野山のはてなく、よる夜なかあくがれ給ふ」(巻一・二二頁) 性格の二の宮は、傍線箇所に見られるように、三位中将の振る舞いが気に食わない。「いかで深く思ひつつまむこと見あらわすわざをせむ」とその跡をつけていた所、案の定「音羽山」のことを知り得、また三位中将の通い所であるとの噂も聴きつけた二の宮の、心の揺れが傍線箇所

語られている。二の宮は、早速「音羽山」に赴く。破線箇所、皇后宮と昵懇の尼君によつて「音羽山」が殊更見知らぬ所でもなかったことが明かされる二の宮もまた、「音羽山」との縁にいとたやすく庵を訪ね当てている。

このように、三位中将と二の宮とは、尼君とのなにかの接点をひき合いに出すことで、「音羽山」を心的にそう遠く離れていない空間とみなしていることが分かる。そして、二人は「音」(琴の「爪音」／「風の音」＝噂)をきつかけに我が身姫君をみつけ出し、にわかになにを懐いてしまう。男君と「葎の門の女君」との、「音羽山」に導き出された「音」に始まる恋の話筋がここで始まろうとするのだ。だが、この接近が、互いに異父母兄妹であるという事実によつて、このあとには常套の内容に陥ることなく、逆に我が身姫君の失踪を招いてしまうという事態へと繋がっていくのだが……。

では、「音羽山の姫君」が失踪してしまったあとで、その幻影の虜となった男君たちは、このあとどのような顛末を迎えるのだろうか。 「対の姫君」という妹が突如あらわれた三位中将であったが、その侍女が「音羽山の姫君」に仕える「山里人」(巻一・七〇頁)であることに気付くと、対の姫君への不審と、「音羽山の姫君」の行方とを、「山里人」である侍女に問い質すことにした。しかし、逆に巧妙な嘘で丸め込まれてしまうことで、対の姫君が「音羽山の姫君」と似ているような気がしても、侍女の話を思い合わせてこの二人を結んでみることはできない。さらに、対の姫君が女三の宮とよく似ていることに思い至ると、「これはせちにほひ愛敬づきたる方ぞたぐひもおはせぬ」(巻一・七三頁)と別の美点をみいだしてあやうく妹に恋をしそ

うな自身に呆れてしまう。一人の女君に二人の女君の姿をみいだし、そのどちらにも恋慕してしまう三位中将であったが、「音羽山の姫君」の行方だけではどうしてもたどり得る術がない。女三の宮への叶わない思いに加え、「音羽山の姫君」の「行方なき」（巻二・七十一頁）ことにも悩みを深めるのであった。

一方、二の宮は「音羽山の姫君」を求めて足繁く「音羽山」に通う。

年の暮になりて、雪あられ激しく、荒らましき風の音に、いどいざなはれ出でて、かひなきあとをだにと、例の音羽の山に踏み分け入り給へれば、まして人目まれになりゆく櫛の花がらのなかに、尼君ばかり萎れぬ給へり。よしなしごとに心をまどはして、おはせぬあとのさ蓆をのみなつかしうし給ふも、こはあるまじかりしことのさまかなと、わりなくぞ見奉り給ふ。

雪氷とづる山路を踏み分けていく夜むなしき床に寝ぬらむひと目見し人のなごりによそふれば涙に朽つる床のさ蓆など、同じすぢのことをのみ思し続けては、事あり顔に帰り出で給ふ道もすずるなりや。

（巻二・七六頁）

傍線箇所は、冒頭で語り出されていた時節と「音羽山」の景とがかさなり合う。そうした風景の働き掛けで、二の宮はせき立てられるかのように「音羽山」に赴く。圈点を付した「例の」という語に、二の宮が「音羽山」に足繁く通っていることが窺われる。しかし、点線箇所、そこがかつての「音羽山」よりもいつそう人の通ってこないよ

うな空間に変貌していたことが語り出される。訪ねても無駄だと分かっているが、せめて姫君のいた跡だけでもみたい、と赴いた「音羽山」で波線箇所のように「音羽山の姫君」のことだけを切々と思う。

皇子は、もとよりひたすら艶にたをやぎて、おもだたしきまつりごとのとありかりも、むつかしうのみ思しとりにしかば、ただ世とともに去らぬ面影のみぞ、恋しかなしと嘆かれ給ふ。

**音羽山** 音にも聞かぬ恋ながら見しよの春はめぐり来にけり  
神仏にも、「この人の行方知らせ給へ」とのみ、願を立て祈りをし給ふも、をこがましや。

（巻二・八四―八五頁）

公事を「むつかし」とだけ思つて全く参画しようとしなない二の宮には、「去らぬ面影」の「音羽山の姫君」だけが胸の裡を占め、波線箇所において「音羽山の姫君」への恋慕にうちひしがれているさまが語り出されている。ただ、ここで目を向けておきたいのは太線箇所、三位中将が「行方なき」ものと思つていた「音羽山の姫君」を、二の宮が「音羽山」に導かれる形で「音にも聞かぬ恋」と詠み出だしたことである。

この「音にも聞かぬ恋」は、ひとり二の宮だけに当て嵌まる言葉でもないだろう。琴の音をきっかけに思い初めた三位中将と、三位中将の通い所の噂をきっかけに姫君の許を訪れた二の宮とは、共に「音」を契機に我が身姫君への恋心を懷いてしまう。しかし、実は異父母兄妹であるという事実を知っている尼君によって各々が深い仲になる

ことだけは妨げられる。とはいえ、尼君もまた詳しいことを知らないらしい。それ故、嘘や事実をほのめかす言葉で姫君と男君とをどうにか遠ざけようとしていた。そして、二人の振る舞いが原因で我が身姫君は「音羽山」を出、ついに幻影になってしまったそのとき、「山里人」である侍従は巧みに「行方」を知る術を奪い、尼君も二の宮を「見」ただけで真相は伝えない。「音羽山」に導かれた「音」に始まる恋の物語は、それぞれが異父母兄妹であるという事実を徐々に語り出した末に、ついに「音」を断つて「音にも聞かぬ恋」であることを痛切に思い知らせたところで幕を閉じ、三位中将と女四の宮の結婚、女三の宮への密通というあらたな話筋を語り始めていくのである。

二人の男君の恋心が、妹の我が身姫君に「音羽山の姫君」という幻影を揺曳させていたとき、「音羽山」が導き出す「音」の変奏を加えた「葎の門の女君」への恋の物語を成り立たせていたということができる。このことを「はじめに」で述べた問いに立ち返って捉え直してみれば、我が身姫君、三位中将、二の宮の三者を繋ぎ合わせていくために、「音羽山」の生み出す「音」が機能していたというように言い換えることができる。そして、二人の男君の恋の挫折を語るのと相前後する形で、関白邸を舞台としたきょうだいの物語が語り始められるようになる。このように、「音羽山」を起点に、我が身姫君の生涯に合わせてさまざまなモチーフへと横滑りしていきつつ、『我が身』の築き上げる作品世界は層を成すように描き進められているといえるのである。

## 五 おわりに

これまで、『我が身』における「音羽山」をめぐる、作品世界を形成する中でどのような影を落としているのか、殊にその「音」を導くという修辞上のあり方に目を向ける形で分析を進めてきた。叙上をまとめれば、まず音羽の尼君は、「音羽山」を世の中との接点を持つことのない「遁世者の「別所」たる「山里」空間として捉えていたといえる。そうした外界との繋がりが断たれた「音羽山」に育った我が身姫君は、漏れ来るような「音」、すなわち噂話に耳を傾けることで父母を思い遣り、またみずから慰めたり、外の世界と繋がりうとしたりするように「音羽山」での月日を送ってきたのだ。一方、三位中将や二の宮には、「音羽山」が音羽の尼君のために心的距離の近い空間としてみなされていた。そして、「音羽山の姫君」Ⅱ我が身姫君の琴の「音」をきっかけに、「音」の変奏を加えた「葎の門の女君」の物語がここで生み出されることになる。「音羽山の姫君」の失踪でそれが「音にも聞かぬ恋」となってしまうと徐々にその話筋は収束してしまうが、これによって我が身姫君と三位中将、二の宮との異父母兄妹の係わり合いが図らずも表立つことにもなった。「音羽山」が持つ「音」を導き出すという修辞上の効果は、各々をとり結んでいく話筋を支えるささやかな表現となつて、これまでにみてきたような形で行文に反映されているのだといえよう。言い換えれば、それは「音羽山」が起点に語り出されることによつて成り立ち得た、作品世界を形成する仕掛けでもあるということだ。

このあと『我が身』がその舞台を専ら宮中に移してしまうと、「音羽山」が顧みられることはほとんどなくなってしまう。殊に、関白邸

に迎えられた我が身姫君は、「音羽山」での懊悩をすっかりはらしたかのような振る舞いをみせている。結局、「音羽山」は姫君の終生に影のようにまわりつくような空間とは語り出されていなかったのかもしれない。そうであるならば、この「音羽山」での歳月が持つ我が身姫君にとっての意味とはどこにあったのだろうか。このことは、「音羽山」が我が身姫君の性格やその生涯の形成にどのような影響をあたえたのか、という問いに係わり合うものと考えられる。

「はじめに」でも述べたが、「我が身にたどる」という言葉が端的に表しているように、従来、我が身の素姓やアイデンティティを探る宿命を負った姫君の、その物語のあり方に注目が集まってきた。その一方で、話型や先行物語の影響はさまざまに指摘がなされこそすれ、我が身姫君にほどこされた造型それ自体への議論は十全に尽くされているとは言い難いだろう。本稿の分析を足掛かりに、巻八に至る我が身姫君の五十余年の生涯の中で、その人格形成にとりわけ作用したと言ひ得る幼少期を過ごした「音羽山」という物語空間へとさらに深く立ち入ること、まだ明らかにしきれない我が身姫君のあり方を炙り出していきたい。

※『我が身にたどる姫君』本文の引用について、尊経閣文庫本を底本とする、大槻修・大槻福子校訂・訳、中世王朝物語全集 20『我が身にたどる姫君 上』（笠間書院、二〇〇九年十一月）を用い、本稿で本文を使用した場合、本文末尾の括弧内に巻と頁数を示した。なお、私に傍線・符号・注等を付し、諸注釈書を参照した上で句読点、改行の位置の変更等の表記を改めた箇所がある。

## 《注》

- (1) 久下晴康「中世擬古物語の発想と形成——「物語取り」の方法から——」『平安文学研究』第六六号、一九八一年十一月
- (2) 辛島正雄「中世王朝物語の特質、第四節 趣向」(大槻修・神野藤昭 夫編『中世王朝物語を学ぶ人のために』(世界思想社、一九九七年九月) 所収)、一三二—一三三頁
- (3) 徳満澄雄氏は『我身にたどる姫君物語全註解』(有精堂、一九八〇年七月、一九頁)の中で、「狭衣型」全般にみられるような文の綴り方の技法(ここでは「修飾型」と呼ばれる)に加え、「はじめに、自分の素姓を知りたいという姫君の願望の中にすばやく読者を引き込み、姫君と読者が一体となつてしだいに謎解きを行なうという構成の巧みさにおいて先行作品に見られない特徴を有する」と冒頭形式にみいだされる趣向の目あたらしさに言及されている。また、後藤祥子氏は、「源氏取りと源氏離れ」(今井源衛・春秋会『我身にたどる姫君 7』(桜楓社、一九八三年一〇月) 所収、一三頁)の中で、「我身姫は誰よりも早く開幕とともにそこにあり、読者は何よりも先に彼女の内側から世の中を眺める仕組みになっている」とした上で、「女主人公の内側から世の中が眺められるという構造、これもやはり多くの物語史を負つてはじめて冒頭に据えられ得た方法といえるだろう」と指摘している。
- (4) 『我が身』の成立は、文永八(一二七二)年に成立した『風葉和歌集』に、巻四までの七首の歌が入集、また、極官が原則の詠者名も巻四ま

での形であるため、その成立は大体一二世紀後葉と推測されている。

小木喬『鎌倉時代物語の研究』（東寶書房、一九六一年一月）、金子武雄『物語文学の研究——本文と論考——』（笠間書院、一九七四年四月）、徳満氏・注（3）前掲著書に、また、近年、金光桂子『我身にたどる姫君』の聖代描写の意義』（『国語国文』第七〇巻第四号、二〇〇一年四月）、小島明子「九条家と『我身にたどる姫君』——物語成立の環境をめぐって——」（『国語国文』第七五巻第二二号、二〇〇六年一二月）に詳細な分析がある。直近は、新美哲彦氏が、当代歌語の用例を中心に、『続古今集』以降『風葉集』成立までに巻四が、『風葉集』以降『玉葉集』成立前後頃までに巻五以下が成立した可能性を指摘している。（『我が身にたどる姫君』の成立時期）（『国文学研究』第一八八集、二〇一九年六月）

（5）後藤氏・注（3）前掲論文、金光桂子「不義の子の歌」（『中世王朝物語全集 栞』第一〇号、二〇〇九年一月）などで、「若紫」巻との影響が指摘されている。

（6）今井源衛・春秋会著『我身にたどる姫君 1』（桜楓社、一九八三年四月）、五〇頁・注一七。以下、本文に頁数と注番号を記す。

（7）『古今集』、『拾玉集』は、『新編 国歌大観』（角川書店）による。

（8）今西祐一郎「山里」（『国文学』第二八巻第一六号、一九八三年一月）

（9）『源氏物語』は、新編日本古典文学全集『源氏物語①—⑥』（小学館）等を参照し、本文の引用は新編全集に依った。以下、これに倣う。

（10）「なほ世に赦されがたうて年月を経ば、巖の中にも（紫の上ヲ）迎へたてまつらむ」（「須磨」②一七二頁）、「花散里ノ邸ニ」月おぼろにさし出でて、池広く山木深きわたり、心細げに見ゆるにも、住み離れ

たらむ巖の中思しやらる」（同二七四頁）。なお、『源氏物語大成』に

よると、『源氏物語』中、「巖」の用例は十一で、その内「巖の中」は五例（「須磨」二、「滯標」一、「宿木」一、「東屋」一）ある。各々は『古今集』詠に基づいて隠遁や出家を仄めかす語として用いられている。ここで、「須磨」巻の用例に殊に焦点を当てるのは、須磨退去という、言い換えれば、宮廷社会との隔てをみずから作り出すという内容を、このときの「巖の中」の語が揺曳させているためである。

（11）笹川博司「源氏物語「山里」の風景」（『国文学』第四六巻第一四号、二〇〇一年一月）

（12）吉野瑞恵「端近」なる女君たち——女三宮と浮舟をめぐって——」（『源氏研究』第七号、二〇〇二年四月）

——こしだ・けんすけ／博士課程前期一年——